

明神の化身・赤童子 「赤童子(覚如上人御筆)」

(茨城県猿島郡境町一ノ谷 妙安寺所蔵)



明神の化身・赤童子1



明神の化身・赤童子2

したまえりや」と、童子答て云く「我此の形を顕したまえりことは、強業難化の衆生を度せんが為なり。悪を作らんものを降伏し念仏の衆生を守んが為なり。善哉、聖人貴僧を待こと年久し、我此の里に来てたえて久く念仏の声を聞かず。聖人念仏の行者となりて、諸の衆生を濟度すべし。我も又もろともに念仏の行者を守らん」とありければ、聖人信心肝に銘じてのたまわく「願くは御姿を写し奉りて、末世の衆生を拝せん」と。自ら袖に

(1)「妙安寺縁起」より

抑、此の仮詣の内にうやまい奉るは、覚如上人の御真筆鹿嶋大明神の御神形なり。

其由来を尋奉るは、往昔祖師聖人常陸国笠間郡稲田に、草庵を結ばせられ、専修念仏の義を広めたまいりに、^{ゆうせい}幽栖をしむと雖も道俗あとを尋ね、^{ほうこ}蓬戸を閉と云ども貴賤ちまたに溢ふれ、老若男女諸とも群集する事盛んなる市のごとく。

聖人自らのたまわく、「諸人群集し弥陀の本願に帰する事これ全く我力らにあらず。偏に和光同塵の結縁より発る処なり。我何卒鹿嶋大明神へ参籠せん」と。ときに建保五年四月上旬、御弟子を召連れたまい、御参詣在けり。

聖人誓いてのたまわく、「我未だ垂跡の御すがたを拝せず。何卒、今日より百日の間歩行を堂社に運ばん。願わくは、和光の形を召したまい」と、一心に祈願したまうに、百日満する暁に聖人の感得に依て、不思議なるかな、社且鳴動して、赤き童子の姿にて顕れたまい。

そのとき聖人のたまわく、「夫、鹿嶋大明神の御本地は尺葉地観文の化身なるに、今、大悲柔軟の形をかかして、何とをろくのごとくに、忿怒の形を顕

此の尊像を画かせられ、鹿嶋高德寺へのこらせたまえり。

爾^{しか}るに覚如上人御開山の御跡をしたい、諸国径回^{みぎ}の砌り鹿嶋に御参詣あらせられ、もって尊形を拝し奉り歎喜のあまり写し奉る。此の赤童子の御影なり。

ゆえありて当寺に伝来し奉る。去れば上の如く大明神は尺葉地観文の化身、聖人は又弥陀如来の来現なれば、みな是内感令然の善巧方便にして、唯仏与仏の知見なり。全く凡^{ぼんりよ}廬の及ぶ処に非ず。未信心了解の輩は、内外の障碍を除き、未来は往生をとげ奉るは、ひとえに有難事なり。

(2)「妙安寺縁起」より

鹿嶋の高徳寺が秘蔵する親鸞直筆の絵像を模写したもの。

建保5年(1217)に親鸞は鹿嶋の社殿に参籠。満願の日の暁に「赤童子の姿」に化身した大明神が顕れ出て忿怒の形相を示し、悪を懲らし念仏の衆生を助けることを約束した。その時の姿を映したのが高徳寺の絵像である。その後、鹿嶋を訪れた覚如により再写されて妙安寺の宝物となった。